

堅きをいふ也、シルカユとは、其薄くして汁の如くなるをいふ也、

〔和漢三才圖會百五〕造釀粥音竹 饘和名加 粥倭名之 醯俗云於

本綱煮米爲糜、使糜爛也、粥濁於糜育々然也、漢書注、黃帝始烹穀爲粥、其厚曰饘、薄曰醯、毛氏曰、粥字从弓、象氣之形、與弓字不同、今皆作弓矣、

按、粥宜新米、如古米不粘滑也、又粗碎篩去粉者曰破粥、是益於病人、本草所載諸粥甚多、不悉記、

〔倭訓栞前編六〕かゆ 倭名抄に饘をかたがゆ、粥をしろがゆ、署預粥をいもがゆとよめり、糜はうすかゆ也、炊湯カキユの義成べし、鶉目飯、墓眼粥といふ事、新猿樂記に見えたり、堅粥といふ事、江次第に見えて、是今時の飯也、糝粥はわりのかゆ也、又芋粥、宇治拾遺に見えて、大將あるじにも是あり、まさすけに見えたり、正月の粥は禁裏にみそうがゆあり、世風記に、正月十五日煮小豆粥、爲天狗祭庭中案上、則其粥凝時、向東方再拜長跪服之、終年無疫氣と見ゆ、伊勢二所大神宮に奉りし事も、儀式帳に見えたり、

〔飯粥考〕粥は少穀多水を煮るの名也、これに味噌を加へたるを曾水といふ、粥の類いとおほかり、

ヲナハノ粥 白粥 温糟粥 豆粥 粟粥 茶粥 しろ粥 とちのかゆ 蔬粥

〔松の落葉〕四粥

むかしの物語ぶみに、かゆといふことのあまた見えたるを、今の世の粥とおもひてはことたがひぬべし、江家次第第七の卷、解齋のくだりに、藏人供御粥堅粥也、と見え、又立御箸粥上入御とあるにて、おもふべし、粥といふは今の飯なり、むかし飯といへるは、こしきにてむしたるものにて、今の世にはゆるこはいひのことぞ、

〔秋苑日涉〕八粥

凡諸穀蒸者曰飯、煮者曰粥、故周書曰、黃帝始蒸穀爲飯、煮穀爲粥、此方人古皆作蒸飯、故呼今煮飯爲